

ちよっと
いい話

毎日新聞はコラム

1877年8月21日。半年前に始まった西南戦争は死闘を重ね、南九州で終盤



にあった。東京・上野公園では天皇・皇后を迎え、第1回内国勸業博覧会の開会式典が華やかに行われた。前日の雨も上がり、涼風が吹いたと東京日日新聞は報じている。

内戦時の開催を危ぶむ見方もあったが、計画を主導した内務卿・大久保利通は実行した。富国強兵、殖産興業の一環である。美術、農業、機械など各分野から国内の優れた

ka-ron 玉木 研二

火論

産品を集めて展示し、評価する。外国人も招き、貿易振興につなげようとした。

欧米の国際博覧会（万博）

を参考にした。蒸気機関による産業革命を機に豊かで多様な製品を生産し、交通手段の発達で人と物、情報が飛躍的に広く行き交う時代が生んだ万博。先進各国はここに国威発揚と権益をからめた。

9月24日、西郷隆盛が自決し西南戦争はやむ。東京の博覧会は11月、無事閉幕した。権力の頂点にあった大久保は翌年5月14日、待ち伏せの士

辛抱と長蛇

族に暗殺される。西郷49歳、大久保47歳だった。

明治の日本に自力で万博を開催する力はなかったが、大久保が残した日本の博覧会はさまざまな分野で継がれ、発達する。そして1970年大阪、2005年愛知で万博を開催。さらに25年には大阪で再び開催される。

延べ6422万人が入場した70年大阪万博は高度経済成長と経済大国の自信を象徴するものとなり「成功体験」として長く共有されてきた。未来の電気機器や月の石な

どを展示、人々は長い待ち時間と行列にテーマ「人類の進歩と調和」をもじって「辛抱と長蛇」と皮肉が出るほどにぎわった。「進歩」と「調和」という言葉ににじむ未来への楽観が今は懐かしい。

上野に博覧会を開いた時代は遠い。価値観は大きく変わった。今、万博の意義や理念は国威発揚や開発推進ではなく、地球規模の課題解決にあるとされている。25年大阪万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。超高齢社会への備え。

健康な生活への提案。さまざまな展開があるだろう。ただ「地球の健康」が脅かされている現実も無視しえない。

このまま温暖化が進めば、屋外で働く時間もかなり制約される。今も北極の氷は解け、南の島々は海没の危機に苦む。何をなし得るのか。私たちはどう子孫に顔向けすればよいのか――。素朴だが、万博にあえて掲げたい。解決には相当に辛抱強い努力と、長い道のりが求められるだろう。（客員編集委員）